

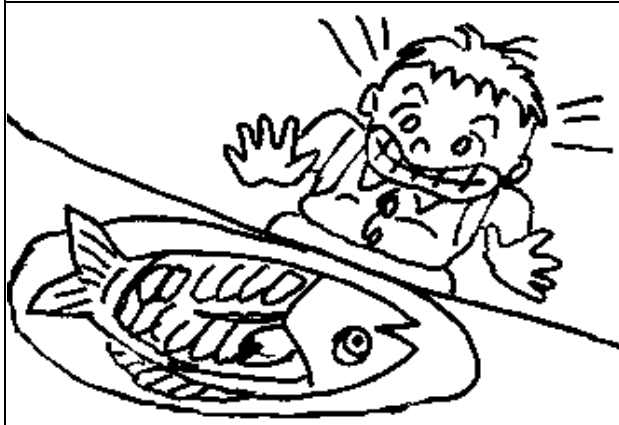
紙芝居原稿

グループNo. _____

タイトル まさかのさかな



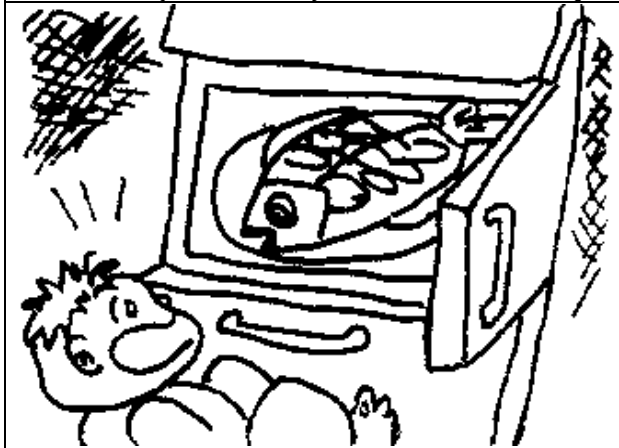
ぼくはまさか！と思ったよ。
今日はぼくの誕生日なんだ。
だから、ぼくは生クリームたっぷりのパースデーケーキやアイスクリーム、特大のハンバーグやお菓子を期待して走って帰ったんだ。
ところがうちの場合はそうはいかない。



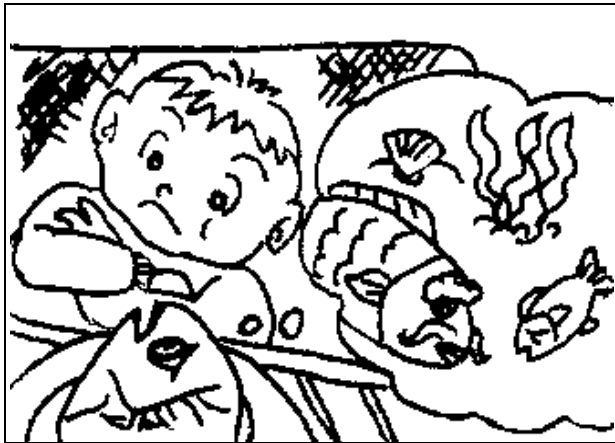
ぼくはテーブルの上のごちそうにショックを受けた。
ママ:「すごいごちそうでしょ。たいはおじいちゃんがとどけて下さったのよ。生け造りのおさしめよ！」
お母さんはぼくが少々肥満児だからって、ケーキもジュースもハンバーグもだめだって用意してくれなかったんだ。
そして、魚を食べなさいって。ぼくは魚が苦手なのに。しかも、どうしてもだめな頭つきのヤツ。



魚がぼくをにらんでいるようで。その大きな目玉で。ぼくんちってまさかと思うこと平気でやっちゃうんだよね。
じい:「たいの頭や骨は明日あら煮にするとうまいぞお！」
おじいちゃんは上機嫌で歌まで出るし、みんなぼくの誕生日だって忘れてないかい？
結局ぼくはおさしめを食べなかったんだ。夜中、おじいちゃんのいびきで寝れなかったぼくは、夜おそくお茶を飲もうとして冷蔵庫をあけた。



たい:「いきなり開けるなよ。ノックぐらいしろ！」
ぼくはしりもちをついた。大きな目玉がギョロリ。これ夢だよね。
たい:「こっちにも都合があるのに、君はひどいよ。君、今日、ぼくのこと食べなかったろ？」
ぼく:「ぼく、魚が苦手なんだよ。」
たい:「そうか。ぼくと同じだったのか。ぼく達は小さな魚がエサなんだけれど、小さな魚の目がこわくて。」
ぼく:「へえ、君もかい？」
ぼくはこわさを忘れて身をのり出した。



たい:「魚が食べれないから、なかなか大きくなれなかったから、おじいさんが教えてくれたんだ。“目のついている生き物は、誰かに食べられると今度はもっと素敵な生き物に生まれ変わる”んだって。」

ぼく:「ふうん。」

たい:「だからぼくもきちんと食べてくれないと生まれ変われないんだ。」

たいの頭が心細く言った。

ぼく:「君、何に生まれ変わりたいの？」



たい:「決めているんだ。人間の女の子って。小さい時、一度見たんだ。かわいくって、うたがうまくって。今度はぼく、絶対に人間の女の子になりたいんだよ。」

ぼく:「じゃあ、ぼくが明日、きれいに食べようか。」

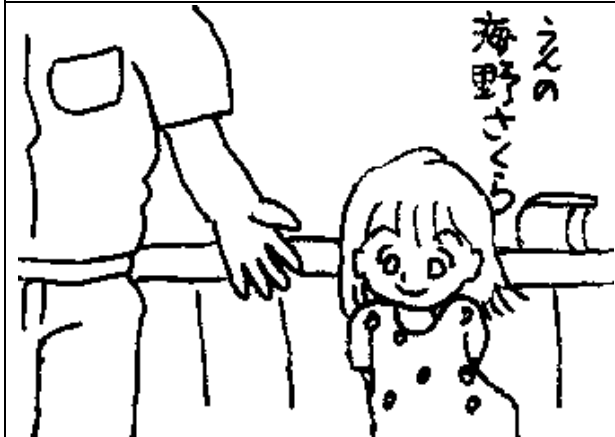
たい:「本当!？」

ぼく:「まかせときな。」

ぼくは心配だったけれど、胸をドンとたたいた。

たい:「そしたら、君とも友達になれるねえ。」

次の日、ぼくはあら煮になったたいをきれいにたいたらげた。



その次の日、ぼくのクラスに転校生があった。先生の横に、かわいらしい女の子がちょこんと立っていた。

その子はうすピンクのワンピースをひらひらさせて大きな目をぼくの方に向けて言った。

さくら:「私、水泳が得意なの。」

ってにっこり笑った。



ぼく:「あっ!まさか!」

その子のうちはぼくの家で、その日引越し祝いにぼくちに届けられたのは特大のたいやきだったんだ。